

未来につなぐ「優しさ」

聖マリア女学院中学校3年 渡邊 絵理香

八月六日は広島平和記念日だ。私の曾祖父は広島出身で、被爆者だ。戦後すぐ生まれた被爆二世の祖父は、幼少期のことを語らない。

私は、最近修学旅行で広島を訪れた。原爆資料館の見学があり、悲惨な現実を知った。目をそむけたくなるような写真がたくさんあった。それを生で経験したのが曾祖父だ。そして悲惨な広島で逞しく幼少期を過ごしたのが祖父だった。一生懸命勉強をして、働いてここまで日本を立て直してくれたのだと思う。

現在の税制度の大枠は、戦後まもなく創設された。日本国憲法に「教育・勤労」に並び、「納税の義務」が定められた。まさに現在の税制度と共に祖父の世代は歩んだ。

広島は美しかった。原爆が投下された直後は、「七十五年は草木も生えぬ」と言われたそう。しかし、その広島がこんなに美しく復興出来たのは、「広島平和記念都市建設法（昭和二十四年度制定）」に基づいて、国から多くの税金の補助があったからである。その税金は、曾祖父や祖父の世代の方が、汗水流して働いて納め続けたものだろう。

最近、大きな災害が多い。地震が起き、想定を超える津波も押し寄せた。また、この夏も異常気象や台風で甚大な被害が出た。

税金は、こういう時に大きな力を発揮するのだと思う。東日本大震災の後には「復興特別所得税」が創設され、復興を助けたと聞く。

一人一人の力は小さくとも、それが集まれば大きな力になる。人間一人では生きていけない。だからこそ、その支えあいが「税金制度」なのだ。税金は「優しさの塊」のようだ。

今、私は何不自由なく暮らしている。曾祖父や祖父と同様に、父も精一杯働いてくれているからだ。父は、役場の「税務課」に勤めている。「確定申告」の時期は一年で一番忙しい。昼間は申告の相談を受け、夕方から通常業務をする。必然的に忙しくなる。父は家族が安定した生活が出来るよう努力している。

父の通常業務は「固定資産税」についてだ。家や土地に関わる税金なので金額は大きい。そこで納められた税金が、他の人へつながる。税金は「優しさのリレーだ」と父は言う。

赤い原爆手帳と共に生きた曾祖父。日本を立て直すために必死に働いて納税をした祖父。広島は「優しさの塊」の税金で美しく復興した。また、税務課で働き「優しさのリレー」の一端を担っている父。この家族のお陰で、私は生きている。「我が家の歴史」は確かに、「税金という優しさ」と共にあった。

「この優しさを未来につなげたい」

次は、私の出番だ。現代は深刻な「少子高齢化社会」なので、しっかり働いて納税しないと日本は傾いてしまうかもしれない。より一層税金について関心を持ち、理解を深め、将来私が働いて納税することで、困った人を助けられるような大人になりたい。

八月六日。原爆のことを思う。そして平和で「優しい」日本の未来を、心から私は願う。